

吉岡齊の活動をふりかえる : 著作物からみた吉岡の 時代区分

綾部, 広則
早稲田大学理工学術院

<https://hdl.handle.net/2324/2543935>

出版情報 : 「吉岡齊の仕事を考える」研究会報告書, 2019-01-20. 「吉岡齊の仕事を考える会」実行委員会
バージョン :
権利関係 :

吉岡斉の活動をふりかえる―著作物からみた吉岡の時代区分

綾部広則（早大理工）

1. はじめに

本日は、「吉岡斉の活動をふりかえる―著作物からみた吉岡の時代区分」というテーマでお話をさせていただきたいと思います。すでに吉岡さん―ここでは吉岡先生と申さずに吉岡さんと申しますが―の著作をご覧なってる方も多いかとは思いますが、もう一度、それぞれの著作を振り返りながら、吉岡さんの活動の時代区分を試みてみたいと思います。このあと登壇者の方々から個々の著作や論点に関する詳細なお話があるかと思いますが、それらを理解するための見取図になればと考え、前座的なお話をさせていただきたいと思います。

まずは私と吉岡さんの関わりについてお話しておきたいと思います。吉岡さんとのかわりは私が九州大学に入学した 89 年頃に遡ります。かつて六本松にありました教養部で、吉岡さんの授業を受けたことがきっかけで、研究室に勝手に押し掛け始めました。卒業が近くなって、科学社会学・科学技術史の研究をしたいのだが、どうしたらよいかと相談に行きましたところ、九大にも関連する大学院ができる話はあるが、あと数年かかる見込みなので、それだったら東京に行ったらどうか、というお話をいただきましたので、東京に行くことにしました。その頃、科学社会学・科学技術史の勉強ができる場所は、国内にはほとんどありませんでしたが、吉岡さんのすすめで、東京大学大学院大学院総合文化研究科の関連社会科学専攻（現在の国際社会科学専攻）に進学し、ここで博士課程に 98 年まで在籍しました。そののち、助手や研究員などをさせていただいた後、2007 年より早稲田大学理工学術院に勤務しております。

先ほど共同研究者ということでお話がありましたが、これは（新）通史フォーラムという団体での活動を通じて吉岡さんと交流させていただいていたためです。（新）通史フォーラムは、2011 年に約 100 人の執筆者で『新通史―日本の科学技術』（吉岡他編 2011→2012）全 4 巻+別巻の 5 冊本を刊行しております。本日の登壇者の方々も何人かこれにお書きいただいておりますので、詳しくはこれをご参照いただければと思います。いずれにせよ、東京に参りましてからは、（新）通史フォーラムで吉岡さんと交流をさせていただいております。

2. 吉岡斉の時代区分

さて、著作物からみた吉岡さんのこれまでの活動を私なりに時代区分を行ってみますと、おおよそ 3 つの時期に分けられるのではないかと考えております。第 I 期は 80 年代初めの、ちょうど吉岡さんが研究者人生を始められた頃から 80 年代半ば頃までです。そのあと、80 年代半ばごろから 90 年代半ばまでが第 II 期、第 III 期が 90 年代後半以降です。吉岡さん

が書かれた著書から見る限りでは、さしあたりこのような時代区分ができるのではないかと
思います。

第Ⅰ期	時評的な活動の時代（80年代初頭～半ば）
第Ⅱ期	理論志向の時代（80年代半ば～90年代半ば）
第Ⅲ期	原子力への実践的コミットメントの時代（90年代半ば以降）

第Ⅰ期は時評的な活動の時代とも呼ぶべき時代です。このネーミングについては、まだ検討の余地があるかと思いますが、テクノトピアをキーワードに、時評的活動を行っていた時代です。代表的著作としては、『テクノトピアをこえて』（吉岡 1985。初版は 1982）や『科学者は変わるか』（吉岡 1984）が該当します。

第Ⅱ期は、理論志向の時代で、ここでは『科学社会学の構想』（吉岡 1986）や『科学革命の政治学』（吉岡 1987）、あるいは『科学文明の暴走過程』（吉岡 1991）といった書物にみられるように、事例というよりもむしろ理論的なこと、吉岡さんの言葉を借りれば、「「技術哲学」的問題群と格闘」（吉岡 1991：217）していた時代です。

ところがⅢ期になりますと原子力への実践的コミットメントを行い始める。おおよそこのように分けられるのではないかと考えています。

2-1. 第Ⅰ期 時評的な活動の時代（80年代初頭～半ば）

それぞれの時期について、もう少し詳しく見ていきますと、まず、第Ⅰ期についてはいま申し上げたとおり、例えば『テクノトピアをこえて』（吉岡 1985。初版は 1982）という、1982年、まだ20歳代の頃に書かれた本のタイトルにあるように、テクノトピアという言葉
をキーワードに科学批判を展開しておりました。

おおよそ察しがつくとは思いますが、テクノトピア論とは、「科学技術の進歩が素晴らしいユートピアを人類にもたらすであろう、と唱える議論」（吉岡 1985:7）のことです。テクノトピア論は、彼によれば、「信用詐欺」（吉岡 1985:8）的なところがあるのではないかと。なぜなら、こういう研究を進めれば、すばらしい未来が開けるだろうと誇大妄想的に宣伝して、予算を獲ってくるというようなことをしがちだからです。

これはよくある話ですが、吉岡さんは、そうしたテクノトピア的な言説は、巨大で先端的な分野だけではなく、オルタナティブ・テクノロジーといった巨大科学とは正反対に位置する分野においてもみられることだと述べています。したがって、まずは「先端非先端を問わず、また巨大・零細を問わず、あらゆる科学技術からテクノトピア論の仮面を剥ぎ取ること」（吉岡 1985:12）が必要であり、それなくしては「科学技術と社会をめぐる問題について、適切な意思決定を下すことはできない」（吉岡 1985:13）というわけです。そしてこれが彼の一貫した、亡くなるまでの一貫した基本姿勢であったと私は思っております。

そのために、それをかつて廣重徹がとった姿勢—「科学を純然たる客体として、第三者的

立場から容赦なく解剖し、そこから一切の神話を剥ぎ取っていかこうとする姿勢、より簡潔に言いかえれば、科学的方法にもとづいて科学を解剖しようとする姿勢」(吉岡 1985: 299) にならって行おうのだと、そういう宣言をしています。それが科学技術への最も厳しい批判になるのではないかということです。これも終生続く吉岡さんの基本姿勢だと思っております。

次に『科学者は変わるか—科学と社会の思想史』(吉岡 1984) についてみたいと思います。これは「平均的な科学者(彼等は現代科学のもつ根本的欠陥などについて悩んだりしない)ではなく、むしろそこから脱却しようとした、異端的な人々の思想的模索」(吉岡 1984: 2) のあゆみを綴ったものです。具体的には、J.D.バナル、坂田昌一、武谷三男、湯川秀樹、朝永振一郎、廣重徹、梅林宏道、柴谷篤弘、高木仁三郎らを取りあげ、そうした人々の主張の論理構造を分析し、それらの意義と限界をさぐることで、科学技術と社会にかかわる諸問題を捉えるための理論構築の足がかりにできないかと考えて書かれたものです。

さらに『科学者は変わるか』(吉岡 1984) のあとがき—実は吉岡さんのスタンスは、あとがきにかなり明確に書かれていますので、本文もさることながら、あとがきをつなげて読めば、ご自身の立脚点がおおよそわかるのですが—では、次のように述べております。

「本書を執筆する際、最初にモデルとして念頭においたのは、廣重徹の『戦後日本の科学運動』である。しかし、廣重を乗り越えようとか、その続編を書こうとかいう意気込みは、時が経つにつれて弱まっていった。そもそも廣重と私とでは、科学と社会の問題へのアプローチの仕方が、かなり異なっているから、共通の土俵で張り合うことは不可能なのだ、ということに気がついたのである。やや図式的に整理すれば、廣重のアプローチは、現代日本の社会体制のなかでの科学者運動のダイナミックスを捉え、そのあるべき姿を探求する手がかりにするというものである。いっぽう私のアプローチは、科学社会学の立場から、科学と社会についての思想の論理構造と、そこにはらまれる問題点を明らかにしようとするものである。歴史的よりも理論的、実践者よりも傍観者、という傾向が強く出ていることは否定できない。」(吉岡 1984: 285)

先ほどから名前が挙がっている廣重徹とは、吉岡さんが私淑していた方で、廣重が生きていたら師匠になっていたのではないかと推察されるような方です。

ところが、どうも自分の考えているアプローチとは違うのではないか。あとでもう一度触れますが、こうした廣重の限界に対する意識がすでに 84 年の段階で芽生えていたということです。

2-2. 第II期 理論志向の時代 (80年代半ば~90年代半ば)

さて、第II期の80年代半ば以降になりますと、急速に理論的な姿勢を強めて行きます。こうした傾向が最初に出ているのが86年の『科学社会学の構想』(吉岡 1986) です。これはマニフェストのようなものですが、吉岡が科学社会学に求められる基本的な態度とその

意義について語った初めての書物であります。ここでは科学を「他のあらゆる現世的な人間活動と同じ平面上」（吉岡 1986：131）に置くと述べています。その上で、社会科学的方法を用いて、開放系としての科学が成り立つ仕組みを徹底的に解剖するのに必要な分析視覚を与えたいということです。先程の話からおわかりかと思いますが、とにかく世俗的な営みとして科学を捉えると言うわけです。ただそれだけではなくて、そこから何かもう少し一般論的なものを導きないかというという問題意識が現れています。開放系という言葉が出ていますけれども、そのために独自に開放系モデル—もともとは槌田敦さんのエントロピー論にヒントを得たと言うことらしいのですが—を立てようと言うことです。

こうした話をするるとよく疑問として出されるのは、欧米の科学論にも近いものがあるのではないかということですが、結論から申せば、吉岡さん自身はあまり関心がなかったといえます。欧米の科学論の流れに与することなく、独自に枠組みを仕立て上げようとしたということです。なぜかといえば、この当時の欧米の科学論は、知識論の次元で議論していたからです。吉岡さんは、よくヒト・モノ・カネという言葉を使っていましたが、ヒト・モノ・カネの観点から現代科学を成り立たせている構造を分析する必要がある。ところが、当時の欧米の科学論で主流であった科学知識の社会構成主義（Sociology of Scientific Knowledge）は、名前から察せられるとおり、その対象は科学知識にありました。それでは不十分ではないか、片面しか見てないのではないかというのが欧米の科学論に対する吉岡さんの診断です。そのことは以下の文章からもわかります。

「さて、『ドクサ』[最初に吉岡さんが書いた論文が掲載されている雑誌—引用者] 論文発表後もひきつづき、科学社会学関係の重要な著作や雑誌論文には、なるべく目を通すよう努めてきたが、『ドクサ』論文で詳しく扱ったマートニアンならびにクーニアン潮流に属する仕事には、次第に関心が薄れていった。マートニアンはそもそも開放系としての科学を分析対象とせず、クーニアンもまた、もっぱら知識論の次元で、社会から科学への影響を考察しているにとどまり、現代科学の社会的問題を究明する手がかりを、あまり与えてくれなかったためである。それゆえ私は、科学社会学の私なりの手作りの思考枠組みをつくる可能性を、追求せざるを得なかった。」（吉岡 1986：242）

次に 87 年『科学革命の政治学』（吉岡 1987）ですが、これは、先ほどの科学社会学の構想で打ち出したアイデアをもう少し発展させたものです。物理学の事例を取り上げながら現代科学のあり方を批判しているのですが、特に注目すべき点は、「内部の腐敗や成果の悪用・乱用によってではなく、そのシステムの・構造的な基本性質ゆえに、現代社会のなかで癌細胞のような役割を果し、数々の社会問題を生み出す源泉となっている」（吉岡 1987:246）という点です。よく何か研究倫理上の不正があると、研究者の心構えや姿勢の問題、あるいは科学の悪用といった観点から議論されますが、構造的な要因に眼を向けるべきだというのが吉岡さんの考えです。そこを変えない限り、ダメなのではないか。それを説明するための概念装置が、先ほどから出てきている開放系モデルです。この開放系モデルを用いれば、

科学が分野の生存と生長を図ることに陥りがちなこと、あるいは科学者たちが利那主義的な認識関心しか持たなくなる理由も理解可能となる。つまり、システムの、構造的な観点から現代科学が生み出す源泉を探り出そうとするわけです。

こうした観点がある種、極限にまで推し進めたのが『科学革命の暴走過程』（吉岡 1991）です。この本の中身に関する吟味は、あとで他の登壇者の方々からなされるかと思いますが、簡潔に申せば、システムの、構造的観点を、研究開発活動を推進する広範な制度的構造まで拡大した作品であります。

実際、この本のなかでは、「現代科学技術の構造とダイナミックスについての一般理論の構築を目指した作品」（吉岡 1991：215）であり、「科学技術社会学の通常の守備範囲を大きく踏み越え」（吉岡 1991：216）ていると述べられています。ただ、基本的なアイデアというのはそれまでの例えば科学革命の政治学に依拠するところが大きいように思います。つまり、『科学革命の政治学』（吉岡 1987）をより政治経済的な側面にまで拡大したようなものであるといえます。

2-3. 第 III 期 原子力への実践的コミットメントの時代（90 年代半ば以降）

ところが、90 年代半ばの第 III 期になりますと、そうした理論的な志向性は失われていきます。『科学革命の暴走過程』（吉岡 1991）の冒頭で述べていた「現代科学技術批判のための体系的枠組みを構築すること」（吉岡 1991：1）や「科学技術社会学（social studies of science and technology）のスケールの大きな理論枠組み（パラダイム）を樹立できるのではないか」（吉岡 1991：1）、「やがて描かれるであろう『資本論』の基本的筋書き」（吉岡 1991：1）といった言葉は消え失せ、原子力への実践的コミットメントを深めていくことになりました。

どうしてこのようになったのか。直接的な理由は二つあったと思います。一つは 97 年 2 月に原子力委員会の高速増殖炉懇談会に参加することになったことです。もう一つは、戦後科学技術の社会史、先ほど冒頭で紹介させていただきました通史フォーラムの前身にあたるプロジェクトに関わったことです。そのことは、『原子力の社会史』（吉岡 2001）のなかの「日本現代史においてビッグサイエンスよりも原子力のほうがはるかに重要であることを痛感し、これを究めずして現代日本科学技術史の全体像を描くことはできないと考えるにいたった」という（吉岡 2011：396）記述からもわかります。

では、原子力への実践的コミットメントを始めるようになって吉岡さんが具体的にどのようなスタンスを取ったといえ、基本的には政策論争サークルでも通用するようなもの、つまり体制構造論と改革構想をめざしたわけです。それをどこから学んだかということこれがまた廣重徹に戻るわけです。『科学の社会史』と言う廣重徹が書いた書物の岩波現代文庫版の下巻に書かれた吉岡さんの解説には、このようなことが書かれています。

『原子力の社会史』で筆者は、精度の高い体制構造論を展開し、またそれと密接に関連

するものとして改革構想も提唱している。体制構造論と改革構想を明確なかたちで打ち出さなければ、科学技術批判の志向をもつ社会史研究として未熟であり、その体制構造論と改革構想は「政策論争サークル」のなかでも通用するものでなければならないという筆者の考え方は、紛れもなく廣重から学んだものであると思っている。」(吉岡 2003: 294)

この記述から、廣重はそのようなことやってたのかという疑問を抱く方も多いのではないかと思います。お読みになった方はおわかりかと思いますが、廣重は、そうしたことは行っておりません。つまり、どういうことかといえば、廣重の限界は、体制構造論と改革構想を打ち出していないというのが、吉岡さんの言いたいことです。廣重は体制構造論と改革構想までやれていない、それに気づいたから、それを乗り越えるために体制構造論と改革構想を打ち立てなければならないということです。少なくとも原子力への実践的コミットメントを行うのであれば、それが必要だと。そういう意味です。ですから、吉岡さんは、反面教師として廣重を捉えていたと解釈できます。その意味で、吉岡さんは、廣重を批判的に継承していたように思います。

3. 吉岡斉の科学批判の特徴

以上をまとめますと、吉岡さんの科学批判には、4 つ基本的特徴があるように思います。

1 つはあらゆる科学技術に対する批判的、非共感的態度です。これは 82 年の『テクノトピアをこえて』のなかに明確に表れているように、「先端非先端を問わず、また巨大・零細を問わず、あらゆる科学技術からテクノトピア論の仮面を剥ぎ取ること」(吉岡 1985:12) ということに集約されている姿勢であります。

2 番目に科学的方法に基づいて科学を解剖することです。これも 82 年の『テクノトピアをこえて』に書かれていますが、「科学を純然たる客体として、第三者的立場から容赦なく解剖し、そこから一切の神話を剥ぎ取っていこうとする姿勢、より簡潔に言い換えれば、科学的方法にもとづいて科学を解剖しようとする姿勢」(吉岡 1985: 299) という言葉に集約されている姿勢です。

3 番目にシステムの的、構造的思考です。これは 87 年の理論志向を強めた時代にでてきている言葉ですけれども、「内部の腐敗や成果の悪用・乱用によってではなく、そのシステムの・構造的な基本性質ゆえに、現代社会のなかで癌細胞のような役割を果し、数々の社会問題を生み出す源泉となっている」(吉岡 1987:246) という言葉に集約される姿勢です。

4 番目がいましたが述べた政策志向です。具体的は、体制構造論と改革構想です。

これらが吉岡さんの科学批判の基本的な姿勢であるというのが、少なくとも著作物からみれば特徴ではないかと思えます。

4. おわりに

時代区分としてみれば、吉岡さんの力点は、時期によってずいぶん関心が異なっていたことは確かです。したがって、前の時代の姿勢が次の時代に引き継がれていないようにみえるかもしれませんが、科学批判という観点からみれば、初期の姿勢は最後まで引き継がれていたように思います。

その背景にはやはり廣重が念頭にあって、広重の批判的継承により政府と産業が主要なアクターとなった時代の科学批判を行っていたのだと思います。

はなはだ簡単ではありますが、後の議論の参考になれば幸いです。ご清聴、どうもありがとうございました。

文献

吉岡 斉 (1984) 『科学者は変わるか—科学と社会の思想史』 社会評論社。

—— (1985) 『テクノトピアをこえて (改訂版)』 社会評論社 (初版は 1982 年)。

—— (1986) 『科学社会学の構想—ハイサイエンス批判』 リプロポート。

—— (1987) 『科学革命の政治学』 中央公論社。

—— (1991) 『科学文明の暴走過程』 海鳴社。

—— (2001) 『新版 原子力の社会史—その日本的展開』 朝日新聞出版 (初版は 1999 年)。

吉岡 斉 他編 (2011→2012) 『新通史—日本の科学技術—世紀転換期の社会史／1995 年～2011 年』 (全 4 巻+別巻)、原書房。

※本発表は、日本科学史学会第 65 回年会 (東京理科大学葛飾キャンパス、2018 年 5 月 27 日) および科学社会学会 2018 年度年次研究大会 (東京電機大学東京千住キャンパス、2018 年 7 月 7 日) において発表した内容に加筆修正したものである。なお、本発表にその後の成果を加味したものを「吉岡 斉の科学批判—著作物からみたその特徴と脱原発運動における位置づけ」として『年報 科学・技術・社会』(第 28 巻, 2019 年) に掲載予定である。